
超常

ヤギ男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超常

【Nコード】

N1702F

【作者名】

ヤギ男

【あらすじ】

実在した涼宮ハルヒに動揺した俺、これからどうなる？

シン 俺のあだ名だ（前書き）

見ない方がいいと思います

シン 俺のあだ名だ

超常、なんてのはたいてい信じられないことだ。　まず始めに、宇宙人

この平凡たる日常に、目が一つしかない、指が三本しかない、手からビーム！なんてのがあると、世界の物理法則が大きく変わってしまう。困るし 教科書変わるしで、何やら大変な事になってしまっただろう。

そして、未来人

そんなものがあると、化学が進みに進みすぎて、困ってしまいそうだ。

そもそもいきなり

「私、未来人なんです」なんていうやつはいないだろ。　そして信じる奴もいないだろ。

最後に、超能力者

まず簡単に考えてみよう　超能力にはいろんな種類がある、動物と喋れたり　時間を操ったりしたりして楽しそうだが・・・深く考えてみよう、もし　超能力者軍団が襲ってきたらどうするか。俺達の　なすすべなんてないだろ　とにかく、まったく後悔しているまさか実在していたとは、そんなこと思いもしなかったからなん？誰かつて？

涼宮ハルヒ

まあなんて早い事だろう　いつの間にか高校生だからな、全く俺も老けたなあと思った。

そういや、部活まだ決めてなかったなあ。

何にしようかなどと考えていたら、自然とバスケットボール部と書いていた、まあ別に困ることなんてないしな。

てな事で部活決定！だったが……

急に首元の服をつかまれ
引きずられていった。

「ちよつ……何っすか!？」

ビックリした俺が言うと「アンタうちの部に入りなさい」

[illegible]

とリアクション芸人みたいになっている俺を、引きずるのは、涼宮ハルヒ？いや、んな訳無い。　　ありゃあ架空の世界だ有り得る

なんて、まずないハハハハハ・・・

連れていかれたのは旧館 噓だろ、このままじゃ、平凡的日常が

あああああ
！！！！！！！！

はあマジかよ、着いたのはSOS団、有り得ねえ

「皆お待ちなせ新入部員の真太郎君よ!!」

何故知っている……

周りにはやはり、キヨン、古泉、長門、朝比奈さんだった。

「そこにいるのは部下の1と2と3と4名前は自分でね」

はあ
・
・
・
・

「おいハルヒ。その・・・真太郎君とやらが困っているぞ」

ありがとう、キョン！！ あんたは最高だ！！

「気のせいでしょう」

「聞いてないねえ！！」

「あ！！そうそう今度、バスケットの試合を申し込んだから」

これまたいきなり何でだよ

んまあなんだかんで、
試合の日が来た！

レ、メンバーはポイントガードハルヒ、シューティングガードオ
 センターキョン・・・古泉達の場所は？

「ああ、彼らは守りよ！アタシ達が攻撃」

「って事はハルヒさん、三人で攻撃して二人で守るといいたいのですか？」「そうよ」

ああ・・・

こいつはバスケの事など 微塵にもわかってねえ。そしてついに試合が始まる！

相手チームは長濱クラブという社会人チームだ。

ジャンプボールは俺がして、何とかハルヒに渡すことが出来た。

「ナイスシン君！！」

いつの間にあだ名を付けたんだ。

そういうと、かなりの速さで敵を抜き去りあっという間に、シュートを決めた。

「ナイススス涼宮さん」「当然でしょ！」

敵はかなりの団結力があり、マジで強そうだった だったが、俺、ハルヒ、キヨンのカット&シュートがかなり効いたのか、試合は45対10だった。「この調子で次もやるわよ」へいへい、わかってるよ

その日の帰り道・・・

「おい、君バスケやらないか？」

うちの学校のバスケ部だった。

「ダメよ！！シン君は我がSOS団のスポーツ万能キャラなんだから！！」

そういわれるとなんか嬉しい。

「うるせえ！！てめえは黙ってる！！！」

なんとハルヒを突き飛ばしたのだ。

「お前ら！！！やめろ！」

「フン！！！」

ドゴ！！！！

という二ブイ音をたてキョンを吹っ飛ばした。

「かは！！！」

キョンはうずくまって腹を押さえている。

「先輩方その話お断りします」

「なに？そんなにその変な団がいいのか？」

「ああ、確かに最初は嫌だったさ、正直いうとなだが今日わかったよ。なんだかんだで俺はSOS団が好きだったんだな、皆が皆楽しそうにバスケしてさ、いままでにない最高の試合だった！だから・・・そんな大事な仲間傷つける奴はぜってー許さねー」

その時俺は相当キレていた。自分でわかる、殺気がそこら中に撒き散らしてあったからな

「わわかった！悪かった」

すぐくおびえている先輩を俺は・・・

「もう遅い」

俺はキョンのようにしてしまった・・・

驚いているハルヒを見て 俺は我に返った。

「え・・・あ・・・う・・・え・・・っと大丈夫っスか？」

「うっうん・・・」

「おっおれは・・・」

あ・・・忘れてた・・・

「おい！重傷の俺を忘れるな」

「あはははは！！！」

ハハハハっなんか空気が 戻ったな・・・。そして次の日

次は優勝候補の田尻高校 だ。どうやらここで負けみたいですよハルヒさん 「まだ負けと決まったわけじゃないわ！最後まで頑張る

のよ!!」

まあ頑張りますが・・・

するとキヨンがこつちを見て。

「アイツ変わったな」

「へ？」

俺は疑問に思った・・・

たいして変わったところなんてないと思うのですが・・・

「あいついつも絶対勝てたんだが、今は最後までだ。だいぶ代わったぜ？」

そうか・・・試合が始まった!

ジャンプボールは、なんなくとり、ハルヒに渡した。だが相手がハルヒにトリプルチームをかけた。「ハルヒ!!」

ボールは何とかキヨンに渡ったが今度はダブルチームをかけられ、ついにボールは相手にわたってしまった。

相手はわざと中に入らずスリーポイントをうつた。しかもなんなくシュートを決め、あっという間に24対10になった。

もうみんな諦めていた。ハルヒはかなり怒っていた。・・・怒っていた? ベンチにいる古泉が電話をしている。何やらマズイ事になっ
ていなきやいんだが・・・

ブー!!!!!!

「タイムアウト!」

古泉がタイムアウトをとった!・・・やべーな・・・

「どうやら閉鎖空間が出来てしまったようです。」

聞こえた・・・

盗み聞きするつもりはなかった・・・

だが聞いてしまった。

「先輩方俺にもその話聞かせてください」

「おや聞いていたんですか？」

「すみません・・・」

「いやいずれ教えなければいけないかったので。まあ、あとでゆっく

り教えてあげます」

そしてタイムアウトが終わった、勝たなきゃいけない。

「ハルヒさん、俺がゲームをつくる」

そういつて俺は、真ん中から突っ込んだ！そして不可能なところからパスを出した！

ハルヒの流石の反射神経でパスを取り、シュートを決めた。

これが何度も決まり、何とあと一本差になった。あと5秒・・・

俺は無謀に突っ込み、シュートをうった！ 入れ！！

しかしゴールに嫌われ、ボールは高く舞い上がった。

ブー！！！！

試合終了・・・

50対48で負けた・・・

帰った後俺はおもつきり泣いた後、すぐに寝た。

「シン君！！！」

俺はその声に反応して、起きた。

ハルヒがいた・・・

ん？ここは・・・

閉鎖空間・・・

だった。

「キヨンは？」

辺りを見ると・・・

いた・・・変なかつこうでのびていた・・・

先輩起きてくださいよ！

「ん・・・シンか・・・」 やっと起きた・・・

「何でまた変なとこにいのよ・・・」

「とにかく部室へ行きましょう。」

ってなことで部室に着き 果たしてもハルヒは自分で行ってしまっ

た。 「古泉はまだかなあ」

俺はキヨンに聞こえるようにいった。

「……………」

「長門からのメッセージも来ないなあ」

ついに古泉が来た。

「遅いぞ古泉」

「いやあすみません……シン君に何と云えばいいのかわか……」

「いや、説明はいらない」

「つといますと？」

「ここは閉鎖空間……アンタは超能力者、長門は宇宙人、朝比奈さんは未来人だ」

「……………」

「そして、ハルヒは

「進化の可能性」

「時間の歪み」

「神」という事だよな」「あなたはいつたい……」

俺は後ろを向き言った

「俺は一般人……が良かったんだが……」

「つという事はあなたが……」

驚いている古泉と、今度はなんだと言わんばかりの顔をしているキヨンに言った。

「試作品1号不純物不完全型有機生命体暴走システム搭載の宇宙人に造られた宇宙人もどきさ」

この言葉で、一気にシーンとなった。

「シンおまえ自身どうやってわかった？」

「閉鎖空間にきてからだ」

「お前はその前からの記憶があるじゃないか」

「俺の頭ン中になんかなり精密なマイクロプログラムを染みこまされていたんだ。」

「……ところでお前はなんだなにができるんだ」

「長門とほとんど同じだ」

「ほとんど？」

「言つたろ？暴走システム搭載つて」

つといて腕を見せた。

紋章があつた。

「なんだ？」

「この紋章には特別な超能力者の全ての力が入っている。この紋章を一度取ると能力が飛躍的によくなる、がリスクもある。暴走してそこにいる奴らはほとんど……死ぬ」

「！」

「とにかく後頼みます」

振り返ると古泉はもうきえていた。

「おでました！」

「な！！」

そして、ついに神人まで出て来てしまった。

「んじゃ……後頼む」

「つて待てよ、別に神人は倒さなくてもいいんじゃねーか！」

「あの時、何もなかったと思つてたのか？」

「あの時現実世界にも神人がでてきたんだ」

「まさか……」

「気にすんな。終わり良ければ全てよし！」

「そうか……」

「俺の身に何かあつたら……ハルヒに宇宙人に拉致されたとしても言つてくれ」

「あいつは俺の情報を重要視しないぞ」

「さあな……」

俺は笑顔でいった。

この数日でこの世界が凄いことになっていることがわかった。
しかつた……
楽

「そんじゃあ、ちよつくらあ行つてきますー！！」

俺は窓から飛び出し神人のところへ向かった。

シン キヨン

「どうする？・・・アイフル」

なんて変な事いつてる場合じゃねえ！！ハルヒを探さねーと！！
・探さなくてよかったみたいだ。ドアを開けた瞬間、目の前をにハルヒがいた。

「あ！キヨン！！なんか出てる！！夢で見た巨人が出てきてる！！もう夢じゃないわよね！？感覚だつてあるんだから！！」

まあまあ落ち着くんだハルヒさん。攻撃されたら一気にペツチャンコだぞ？俺はまだ死にたくねーよ。

「大丈夫よ！！なんか安心するのよ！！」

どんな根拠があつてそんな事が言えるんだ？

ドスーン！！！！！！！！！！

大地が大きく揺れた。

窓の方を見ると、神人が倒れていた。

「何々？」

ハルヒが外を覗いた。

「キヨン・・・誰あれ？」

疑問に思つた俺は、外を覗いた

何とそこには、変わり果てた、シンの姿があつた。

右腕が化け物のような形をしていて、右眼はアニメに出てきそうな化け物の眼だった。

そして後ろには悪魔のような幻影がうつっていた。

「シン・・・」

暴走したんだな・・・

「シン・・・君？」

ハルヒはドアを飛び出し、シンのところへ行ってしまった。

「ハルヒ！！行くな！！！」

俺はハルヒを追いかけた。

「シン君！！！」

キヨン シン

「く・・・る・・・な・・・！！！」

俺はまだその時意識があった、俺はハルヒをギロツと睨んだ。

「あ・・・・・・」

ハルヒはかなりおびえた。

スマン・・・危害を与えたくないんだ。

ドクン！！！！

「ぐっ！！！！」

マズイ意識が・・・

苦しんでいる俺を見てハルヒが

「シン君！！！」

後ろから抱きついてきた！！

「！！ば・・・はなれ・・・」

振り向いた瞬間ハルヒの唇が俺の唇に重なっていた。

ビククリした！！

っと思つていたら既にベットのの上にいた。俺はそのまま朝まで放心状態だった。ただ今3時1分・・・

学校に着くとハルヒが校門の前で俺を待っていた。

「おはようシン君」

「どうも」

これからが一苦勞だった。

何故かハルヒは俺の腕を掴み

谷間に腕を挟んだ。

なんかいい空気になったからちょっと触るくらい……

いや触ってないぞホント

「あつ！エツチな事考えたでしょ！」

ちよ……腕を胸に押し付けなくてくれ！理性が理性がああ！！！！！！

まわりがすんげえ眼で見てるし！ホントマズイですよハルヒさん！
まわりからみたら付き合っているみたいに見えますよ！！「いいじゃない別に」

なにがいいものか。キョンにやってやれば良いものを。

「キョンは私の奴隷だからそんな事しないわよ」

つてな感じで、わがSOS団の部室の中に入った。予想通り長門がいた。

「どうも長門さん」

「………」

返事ぐらいあってもいいだろ。

「……どうも」

まっこんな感じが、っとキョンがトサカみたいな寝癖で来た。

「シャキツとしてください」

「ほっとけ」

わかったよ、あんたの事だ、全然寝れなかったんだろ？そこら辺で寝といてください。

つと言おうとしたらもうすでに寝ていた。

ガチャ

又誰か来た。振り返ると既に半泣きの朝比奈さんが

「あ・・・あ・・・」っという泣いてもいいような声をしていた。

「やあ、朝比奈さん・・・」

「シンクーン!!」

俺はギリギリのタイミングで、朝比奈さんが抱き着くのを阻止した。そして心の中で

（ハルヒさんに見られたらどうなるかわかりませんよ）
といった。

どうやらわかつたらしくそつと後ろにさがった。

「あつ、ごめんなさい!」

「いえいえ、私もボーツとしていましたから」

古泉、あんたはいつからそこにいたんだ。

まあなんだかんだでメンバー全員が集まった。そして放課後、
長門に呼び出された。言われたのは

「貴方の世界に戻す事が出来る。」

ビックリしたな俺は元々この世界の住人かと思ってたからな。

「・・・どうするの？戻る？」

考えるまでもなかった、俺の答えはもうとっくに出てるからだ。

「いやまだいい」

「そつ」

ああまだやることがある。

古泉とボードゲームで勝利したい。長門に本でもプレゼントしたい。
朝比奈さんのコスプレ衣装もみたい。キヨンの本名が聞きたい。ハ
ルヒとキヨンの仲を 引っ付けたいつてのものもあるな。

まあ一番やりたいことは、又、 皆でバスケをやることこれに尽き
る・・・

ちよつとだけ後の話

「キヨン君、シン君が来てるよ」

「なに？」

外を見ると確かにいた。

ドアを開けると

「よっ！キヨン」

「せっかくのSOS団の休みなのになんだよいきなり」

あんなに元気いっぱいハルヒが休んだから俺らも休みつて事になったのだ。

「いや、大事な話だ」

「またおれの不安要素が増えたか？」

「いや、実は：今日で俺のいた世界に帰るんだ」

いきなりだったので固まってしまった。

「待てよ、なんで帰るんだ。」

「俺が又いつ暴走するかわからない、そうなる前に、俺は帰るんだ」

それ以上何も言えなかった。

「じゃあ俺はこれで…」

「お、おい」

「あそうそう、妹さんに言っといてくれ」

「何をだ？」

「君が大好きだった」

「………は？」

「何回か会ってたんだよ」

「いつの間に……」

「それでは……」

いつの間にかシンは消えていた。

あいつがどこに行ったかは知らないだかあいつはここにいた。

確かにいた。

俺は妹に言った。すると

「私も好きだよ？またデート行けるかな？」

「デートしたのか！？」

「うん、キスもしたよ」

シンいろいろな思い出ありがと 次会ったら詳しい事聞かせてくだ
さい。

いや聞かせろ。

END.....

シン君付き合って？

.....はい？

次回は妹さんと付き合う

キョン、妹さんの名前教えろ。

シン 俺のあだ名だ（後書き）

見ないでって言いましたよね？

五年後（前書き）

ちょっとやばいです

五年後

あれから5年。俺はあのハルヒWorldにいった。

辺りを見回した、変わったところといえは北高が新しくなったことぐらいだ。

さて古泉が迎えにくるとこだが　　と遠くに見えるのは誰だ。

ん？女？ポニーテールでロリ、　　あリや高校生だな。

「シンクーン」

この声どつかで聞いたことが……

「やっぱりもどつてたんだ」

キヨンの妹さん…か？

「そうだよ？大人っぽくなったでしょ？」

「子供じゃなくなったな」

「もう、前も子供じゃなかったもん！」

かわいくなつたなこいつ、そういうのが子供なんだよ。ところで古泉は？

「機関の人に呼んでつて言われたの」

ん？何故知っている？

「古泉君が死に際に教えてくれたの全部」
死に際つて…

「古泉君ね、神人にやられたんだつて」

古泉がしん…だ？……

涙が出てきた。

「シン君どうしたの？……きゃ…？」

俺はキヨンの妹に抱き着いた。

「大丈夫すぐ泣き止むから、それまで……」古泉が…死んだ。
その言葉に逃れたい一心で俺は妹さんに抱き着いた。

「シン君…」

「ごめん、キヨンや朝比奈さん達は？」

「キヨン君は病院にいるよ」

キヨンはどうしたんだ？

「うつん、キヨン君じゃなくてハルヒさん」

「……………へ？」

「ハルヒさん、キヨン君と結婚してるんだよ？病院にいるのは妊娠してるから」

「へ、へ……………」

まさかとは思ったがそのまさかとはな。

「朝比奈さんは未来に帰ってるよ」

そうか、今頃

「白雪姫って知ってます？」とか聞いてんだろうな。

「長門さんは……………よくわかんないけど色んなプログラムを作ってるよ」

ついに何が得意かわかったな。「んじゃあとりあいず、病院に行くか。」

「うつん！」

俺の目の前にいる女の子は、満面の笑みでそういった。

病室にはいると、ハルヒ とキヨンがいた。

「よっ！」

「おっシンじゃねえか、いつ戻ったんだ？」

「んゝちよつと前」

ハルヒは寝ていた。かなり腹はふくれていた。

「いつなんだ」

「今日だ。」

「そうか……………」

話が続かん……………」

「シン君は彼女いるの？」

「そーいうのを唐突に聞くんじゃないありません！」

「いねーよ」

「!!」

彼女の〇〇〇からいやらしい汁が出ている。

俺は中に挿入した。

「あん! あああ! 気持ちいい!」

「ハアハアハア、うっ ああ!」

中に出てしまった。

多分だがこれが付き合う原因だったのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1702f/>

超常

2010年12月5日06時00分発行